

「映像修復」事例集

2003年～2021年 実績

- はじめに
- 重要文化財『紅葉狩』
- 日本実験映像史のマイルストーン『銀輪』
- 最古級アニメーションフィルム『なまくら刀』『浦島太郎』
- 国立国会図書館における旧式録音・映像資料のデジタル化調査
- 小型フィルムの35mm化(立命館大学アートリサーチセンター所蔵)
- 「玩具映画および映画復元・調査・研究プロジェクト」
- 韓国映画『King Gojong and Martyr An Jung-Geun』
- 韓国映画『Sorrowful youth』
- 『ナイルの娘(原題:尼羅河女兒)』
- 【講演レポート】『千人針』(1937年)の復元
- 【講演レポート】クラシック映画のデジタル修復～『地獄門』を題材に～
- デジタル復元作品の作品名一覧

当社では、貴重な文化資産を後世に残していくため、長きにわたって映像修復に挑戦してきた歴史があります。2000年代に入りデジタル映像技術の進歩に伴って、その取り組みは新たな局面を迎えてきました。

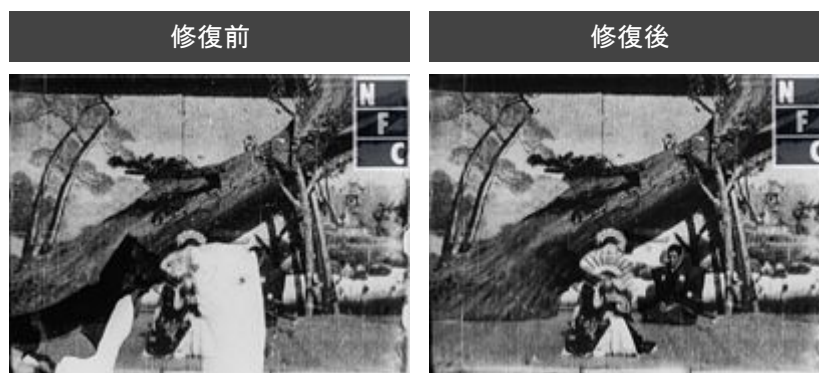
アナログとデジタルを融合しながら、ラボ(現像所)として培ってきたフィルムの知識と最先端の映像技術を活かしてさまざまな映像修復に取り組んできました。

手掛けた映像は、日本の文化財や海外の重要作品を含み、修復のアプローチも多岐にわたります。そのなかから過去に行った映像修復の事例をいくつかご紹介致します。

この資料は、株式会社IMAGICA(当時)の公式Webサイトにて公開していた映像修復の事例集をPDF資料として加筆再編したものです。

『紅葉狩』(1899年)は、2009年に映画フィルムとしては初めて国の重要文化財に指定された作品です。

フィルムセンター監修のもと、重要文化財に指定された可燃性デュープネガからの全編デジタル復元を担当しました。

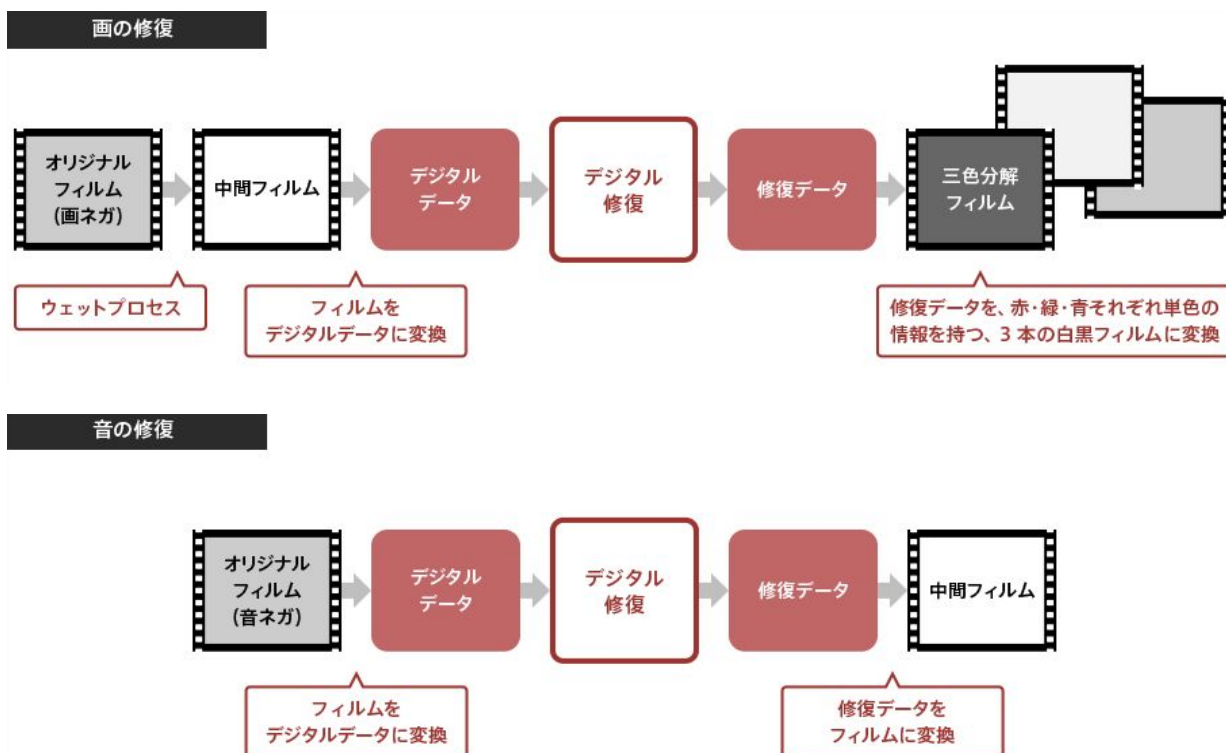


国立映画アーカイブ所蔵

重要文化財指定されたきわめてデリケートなフィルムにダメージを与えないよう作業することが最優先事項であり、“復元”という意味では、初公開当時に上映した映像を再現することが重要でもあり、文化財としての側面も重要視しながら修復、そして復元を実現しました。

『銀輪』(1955年)は、日本の実験映像のパイオニアである松本俊夫監督の初期の代表作として知られています。

デジタル復元及び、長期保存を目的とした“三色分解フィルム”の作成を担当しました。



作品の監督自らが監修に参加の上、デジタル修復を実施し、褪色した色の再現については微妙な色彩をデジタルデータ、フィルム、DVDなど様々なメディアで正確に再現するため、IMAGICAでは独自に開発したカラーマネジメントシステムを構築し、修復したデータから三色分解フィルムを作成。また本作品は、音に関してもデジタル技術による修復を実施いたしました。



国立映画アーカイブ所蔵

日本において、コマ撮り式アニメーションが初めて公開されたのが1917年であり、この『なまくら刀』も同年に公開、『浦島太郎』はその翌年公開作品となります。

現存が確認されている中では、最古のアニメーションフィルムであり、発見者でもある松本夏樹氏の協力の下、デジタル復元及び、染色処理を担当しました。



染色処理の一例



本作品はフィルムを染料で染めた“染色フィルム”であるため、そのフィルムからウェットプロセスを使用し、中間フィルムを作成しデジタルデータに変換し、デジタル修復を行います。修復したデータをフィルムに変換した後、IMAGICAで独自開発した染色機を使用し、染色処理を行いました。IMAGICAでは、伝統的な手法を用いたアナログ的な処理と、先端のデジタルテクノロジーとのコラボレーションにより、対象となる作品の復元に最適なワークフローを、その都度構築しています。

平成20年度の国立国会図書館における旧式録音・映像資料のデジタル化に関する調査を行いました。

今回の調査では、下記の種類の資料が対象となりました。

録音・映像資料

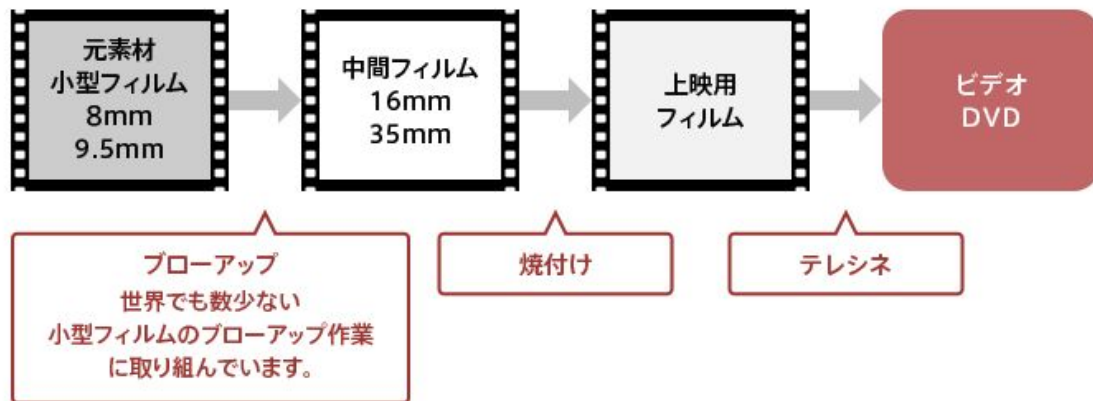
カセットテープ
オープンリールテープ(6mm 磁気テープ)
VHSビデオ
ベータビデオ
U規格ビデオ
レーザーディスク
VHD
16mmフィルム
8mmフィルム

これらの資料について、数点ずつのサンプルを取り上げ、サンプリング周波数、フォーマット等の条件を変えながらデジタル化を試行し、定量的・定性的な結果及び考察をレポート致しました。

本調査の結果は、国立国会図書館様のホームページにて公開されました。

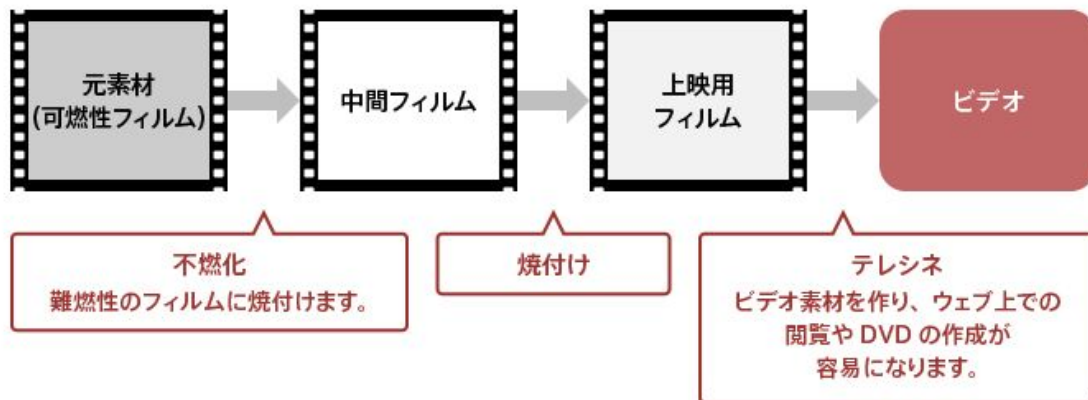
IMAGICAでは、上記の録音資料・映像資料の他にも、様々なフォーマットからのメディア変換に対応しております。録音・映像資料のデジタル化、複製、マイグレーション等のご要望がございましたら、お知らせ下さい。また、どのフォーマットで保存すべきかお悩みの方や、お手元の資料のフォーマットが不明な場合等も、お気軽にお問合せ下さい。

立命館大学アトリサーチセンター様の所蔵素材であるエトナ映画社関連8mmフィルムや、地域性の色濃く表れた9.5mmのホームムービーから、35mmの複製フィルムを作成。



フィルムの状態検査により作業の可否判断を入念に行い、必要な箇所には補修を施し、フォーカスや画格を厳密にコントロールした機材を用い、中間フィルムおよび上映用フィルムを仕上げます。9.5mmフィルムの中央にあるパーフォレーションの取り扱いについて検討・相談を重ね、画像の情報を可能な限り残すために、複製フィルムにもパーフォレーションが映り込むようにブローアップ作業を行いました。

2003年より玩具映画プロジェクト(通称:玩具映画プロジェクト/大阪芸術大学)の依頼を受け、玩具フィルムの不燃化作業(複製ネガと上映ポジの作成)、およびテレシネ作業に取り組み、これまでに約900本の玩具フィルムが熟練技術者の手により複製されました。



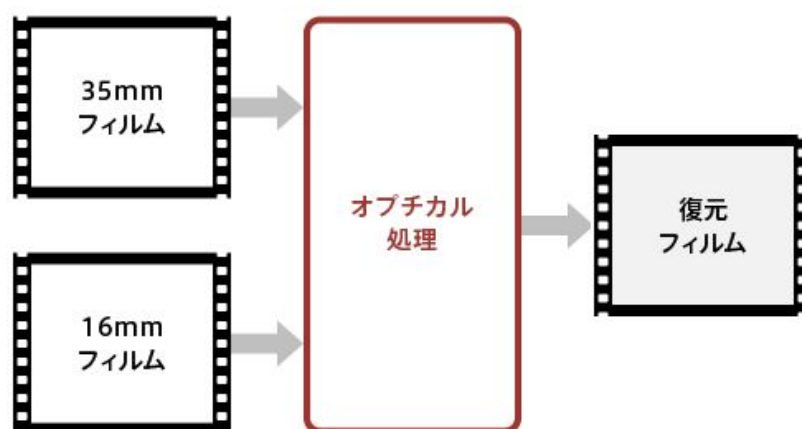
戦前の素材であることがほとんどの玩具フィルムは、少なからず深刻な経年劣化を被っています。そうした物理的な劣化を補修することが、玩具フィルムの不燃化作業では重要なカギを握ります。事前処理として入念に補修を行い、加えて、中間フィルムを作成する時点で、元素材にある軽微な傷をウェットプロセスによって一時的に埋めることで、仕上がりの美しいフィルムができあがります。

Jeon chang-keun監督の1959年作品『King Gojong and Martyr An Jung-Geun』(109分)は、当時の韓国で最大の予算で制作された大作映画で、韓国国内で多くの賞を獲得し、この年の韓国映画の中で第5位の興行成績を記録した作品です。



provided by Korean Film Archive

写真光学的な処理を用いたアナログ復元を担当しました。



復元する元となった素材は、35mmと16mmの2種類があり、それぞれから状態の良い部分を選択し、1本の復元フィルムを作成しました。またこの作品には、現在では用いられなくなった特殊な方法で合成した箇所や、フィルムの劣化が激しいため復元に使用できない箇所が存在していたため、オプティカルワーク(写真光学的な合成技術)による復元を行いました。

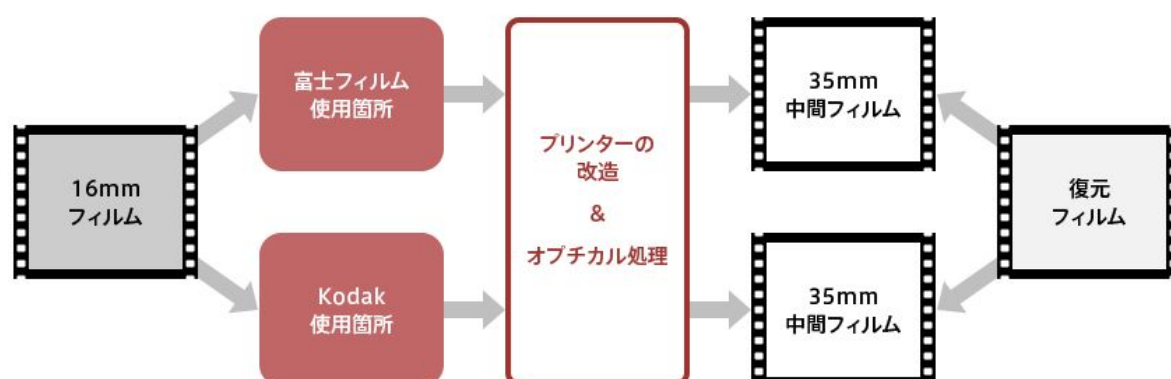
Gang Dae-jin監督の1967年作品『Sorrowful youth』(99分)は、1953年に出版されたKim Raeseongの同名小説をもとに制作された作品で、公開年で最大の興行成績を収め、60年代で第9位となるものでした。

troikaという60年代後半の3つ星スター女優の一人で、韓国の偉大な女優であるYunJeong-heeのデビュー作品で、韓国でもっとも名誉あるDae-jong-sang賞で新人賞を獲得した作品でもあります。



provided by Korean Film Archive

この作品の復元にあたり、写真光学的な処理を用いたアナログ復元を担当しました。



復元作業の元素材となった16mmフィルムは、富士フィルム製とKodak製のフィルムが混在して使用されており、2者の中で劣化の状況が大きく異なっていたため、まず元素材をフィルム別に2分割し、それぞれのフィルムで作業を進行了しました。

元素材の16mmフィルムから35mmの中間フィルムを作成する過程において劣化が激しかったため大きな画揺れが起きてしまい、プリンター(複製を行うための機械)の改造による対応を実施し、さらに、この元素材の16mmは35mmからの縮小フィルムだったため、当時の縮小処理が適切ではなかったようで、正しい画郭になるように写真光学的な合成技術による修正を実施しました。

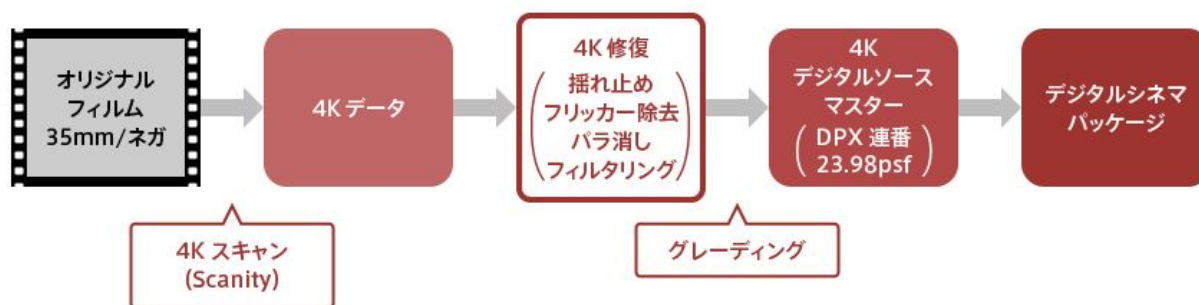
『黒衣の刺客』『珈琲時光』で知られる侯孝賢(ホウ・シャオシェン)監督の1987年公開作品。

第5回トリノ国際映画祭審査員特別賞、第24回金馬奨最優秀音楽賞をそれぞれ受賞した作品です。この作品の復元にあたり、「4Kでのオリジナルネガからのスキャン、映像・音声のデジタルレストア、DCP作成」を担当しました。



©Taiwan Film and Audiovisual Institute

高品位 4K 修復リマスター作成ワークフロー



海外作品初の4K復元作品である本作は、素材は比較的新しいフィルムだったものの、フリッカーや多数の染みが発生していたため、手作業での処理が長時間必要になりました。音声修復においてはノイズの低減だけでなく、リップシンクの再調整も行なっています。現地との距離が課題であったカラーグレーディングは、リファレンスとなる上映プリントと担当カメラマンからの申し送りを頂き、再現を行いました。なお、本復元版は2016年のベルリン国際映画祭(Berlinale Classics)にて上映されました。

日本に現存する最古のカラー・トーキー映画『千人針』(1937年)の復元—アナログ・デジタル技術を活用した二色式カラー映画の色再現



2016年3月7日にシンガポール国立博物館で開催されたジョイント・テクニカル・シンポジウム(以下JTS)2016にて東京国立近代美術館フィルムセンター(NFC)の研究者・大傍正規氏と共に、IMAGICAの長谷川智弘(カラーマネジメントアドバイザー)が登壇し発表いたしました。その際のレポートをお届けします。



画像提供:東京国立近代美術館フィルムセンター

発表内容について

JTS2016におけるプレゼンテーションのタイトルは「The Restoration of The Thousand-Stitch Belt(1937): Utilizing analog and digital techniques to retrieve the colors of a two-color system」。(日本語訳は『『千人針』(1937年)の復元—アナログ・デジタル技術を活用した二色式カラー映画の色再現」)

シンガポール国立博物館のギャラリーシアターにおいて、20分間ほどの発表となりました。発表の前半をNFC大傍氏が担当し、『千人針』が復元に至るまでの経緯と、IMAGICAウエストにおける当時のフィルムの写真光学的なシミュレーションについてのプレゼンテーションが行われました。発表の後半でIMAGICAの長谷川より、『千人針』のデジタル復元において採用された、世界初の手法について説明を行いました。

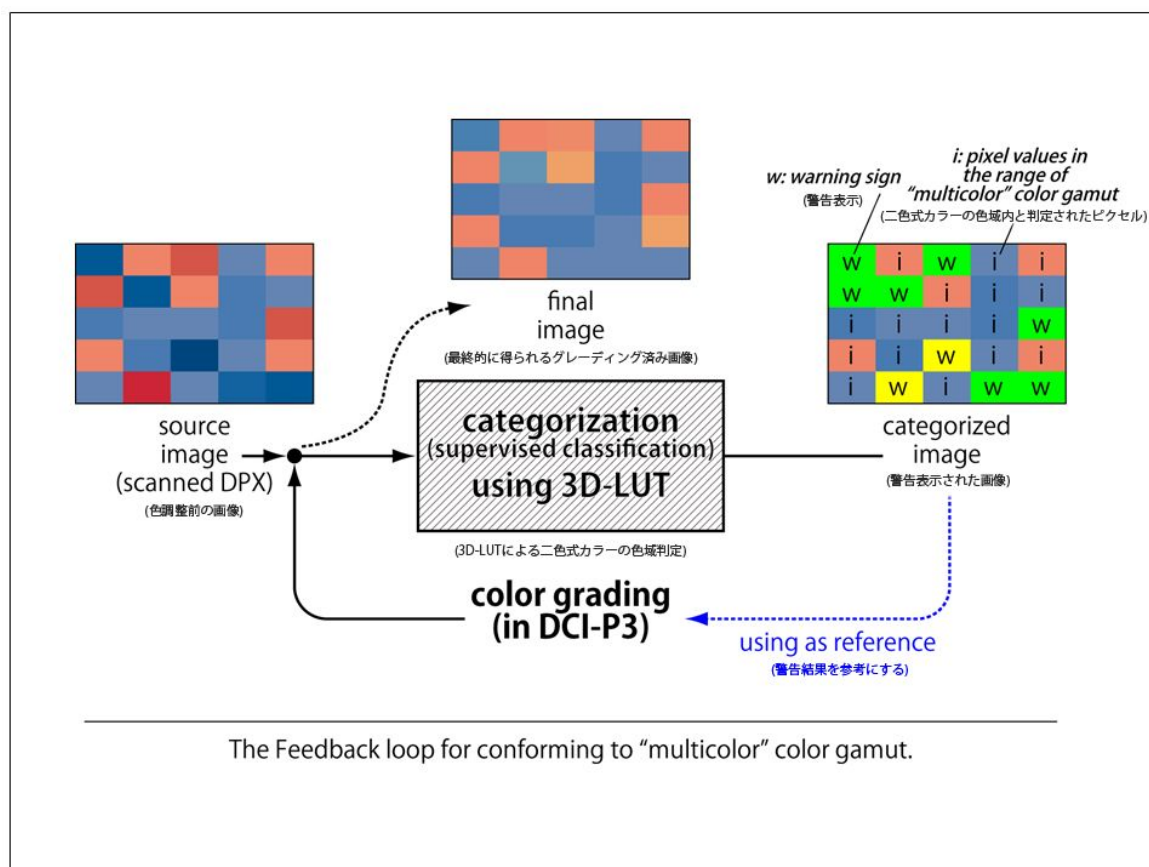
今回の取り組みは、『東京国立近代美術館 研究紀要』(20号、pp.22-34、2016年)所収の「『千人針』(1937年)の復元—アナログ・デジタル技術を活用した二色式カラー映画の色再現」より、その詳細を閲覧することができます。

詳細は下記をご参照ください

<https://www.momat.go.jp/ge/research/#section1-3>

このレポートにおいては、IMAGICAが担当させていただきましたプレゼンテーションから、抜粋資料とともに、今回の復元における取り組みについて説明いたします。

二色式によるカラーで表現できない発色の修復



専用LUTを使用したグレーディング

今回の『千人針』におけるデジタルでの色の復元作業では、当時の赤とシアンの色によるカラーでは表現できない発色を、復元時にどのように制限をするかという点がポイントとなりました。IMAGICAウェストでの写真光学的なシミュレーション(現在入手可能な薬品・フィルムを使用した当時の処理の再現)により得られたチャートを計測・分析し、そこからLUT*を作成しています。このLUTにより、二色式のカラーで再現不可能な色は緑、または黄色で警告される仕組みとなっています。

*画像処理において、主に色の変更のために用いられるファイルのこと。

LUT適用による効率的なグレーディング作業



画像提供：東京国立近代美術館フィルムセンター
左：カラーグレーディング前/右：カラーグレーディング後

左側はグレーディング前の映像にLUTを適用したもので、さまざまな理由により出現した、二色式カラーでは表現できない色が警告されています。右側は、LUTを使用しながらグレーディング(映像の色を専門に扱うスタッフ、カラリストによる映像の色調の補正・修正作業)を行った結果であり、図の通り、緑色に警告されている箇所が大幅に少なくなっています。警告箇所を減らすように色を動かすことは、本来の発色が再現されるように自然と画全体の色調が整う結果につながります。この色調調整の感覚をカラリストが掴むことで、効率的な色の復元が可能になるのです。

LUTの作成

LUTを作成するにあたっては、写真光学的なシミュレーション結果をどのように活用するのが問題となります。様々な検証により、シミュレーションにより得られたデータから、色の違いが、ある閾値未満となる色の集合を二色式カラーの色域*の内側とみなすことが妥当な処理であるとの結果が得られました。色域内の色はそのままに、色域外の色の集合を緑または黄色に着色するという計算処理によりLUTは作成されました。

今回の復元では、二色式カラーの特徴を理解し、その色域を特定し、それらをグレーディング時に有効に活用することができたといえます。結果、『千人針』の当時の発色を再現することができました。今回の復元に係る知識を用いれば、素材そのものの詳細な色の分析が難しいケース、当時の製作者や監修者による色のディレクションが実現できない状況においても応用可能です。また、他の特殊なカラーの再現においても有効な手法となることが期待できます。

IMAGICAでは復元作業において重要な要素となる色に関して、今回のような事例を糧に更なる技術の集積に従事して参ります。

*色の鮮やかさの表現範囲のこと。規格やデバイスによってさまざまな色域が存在します。

(注)この特集記事は、株式会社IMAGICA Lab.への合併以前のもので、本文中の社名表記は取材当時のものです。



10月26日、東京国際映画祭・歌舞伎座スペシャルナイトで上映された映画『地獄門』4Kデジタル復元版。上映終了後、その蘇った色彩の美しさには国内外の観客から絶大な拍手が送られた。本作の修復はどのように行われたのか。

10月27日、六本木アカデミーヒルズ49オーディトリウムにおいて、「クラシック映画のデジタル修復～『地獄門』を題材に～」と題し、東京国際映画祭・提携企画としての公開セミナーが行われた。

第7回カンヌ国際映画祭のグランプリを受賞し、第27回アカデミー賞では最優秀外国語映画賞 & 衣装デザイン賞を受賞した『地獄門』。

劣化したフィルムがデジタル技術によってどのように蘇ったのか。その狙いが説明され、修復の実際を目で見ることができる貴重な機会となった。

映画フィルムの衰退～だからこそ、フィルムで残したい

登壇した株式会社IMAGICA 映像事業本部 プロダクション部 アーカイブグループの新井陽子は、現状について次のように語り始めた。

「映画館でのフィルム上映は少なくなり、お若い方はもしかしたら、フィルムで上映するという形そのものを知らないかもしれません。しかし、かつてはフィルムでの上映が当たり前であり、フィルムは作品そのものでした」

映画フィルムの衰退を象徴する出来事として、3つが挙げられた。

2012年、アメリカ・コダック社の経営破綻。2013年、富士フィルムが映画の撮影・上映用のフィルムの生産終了を決定。フィルム上映のスクリーン数の減少(全国のスクリーン数3472館のうち、デジタル上映は3392館。※2016年12月末、一般社団法人 日本映画製作者連盟調べ)。

さまざまな仕事を手がける株式会社IMAGICAだが、近年、フィルムのデジタル修復が主たる事業の一つとなってきているという。

「フィルムは環境に作用されて劣化しやすいという特徴をもっています。製造から長い年月が経つことでさまざまな症状を起こしてしまいます。フィルムは本来しなやかなものですが、縮みやキズ、ひび割れ、褪色といった形で劣化が顕著になります。長年置いておくことでこういった症状が進んでしまうのです。すぐに手立てをとらないと、ぼろぼろになってしまいます」

フィルム修復の過程～手作業での修復後、デジタル修復へ

デジタルでの修復の前に行われるのが、手作業による修復だという。フィルム原版を検査、修復するところまでをフィルムのレベルで行う。具体的には、フィルムの欠けた端を補修して元に近い状態まで戻したり、縮んだフィルムをしなやかな状態に戻す、などがこの作業に当たる。



新井陽子

「しかし、こうしたフィジカルなアプローチには限界があります。そこで、この後にデジタルでの修復に入ります。ここからはそのデジタルでの修復について説明いたします。

フィルムはアナログなものです。ですので、それをPCで扱えるような形式に変換します。解像度、ビット深度、フレームレート(1秒間に24コマ)。こうした要素をすべてデジタルデータに置き換えていくということ、それがフィルムのデジタル化です。私はこの仕事を10年以上やっていますが、始めた頃はまだアナログ放送でしたので、その時の解像度の主流はSDでした。その後、ハイビジョン放送が始まったり、ブルーレイの規格化などがありまして、HDの解像度が主流になりました」

そして、今回の『地獄門』修復のように、完全復元を目指す場合、さらに高度なデジタル技術が必要とされる。

「解像度が大きくなるということはそれだけデータ量も増えていきます。現在の4Kや8Kなどは、ものすごいデータ量になります。デジタル修復というのは、基本的にPCですべて行う作業なので、データ量の大きさが作業の大変さに直結するのです。でも、4K修復は私たちが達成したい目標でした。一般的に映画というものは35ミリフィルムで撮られていることが多く、35ミリフィルムの情報量をできるだけ精細にデジタル化する場合、必要となる解像度が4K相当だと言われているのです。私がこの仕事を始めた当時、扱う解像度はSDでやっとの状況でしたが、最近ようやく、4Kでのデジタル修復が実現しています」

高精細映像時代だからこそ、もう一度フィルムに戻して次世代へ残す

今回、本セミナーの題材となった『地獄門』（4Kデジタル復元版）は東京国際映画祭・歌舞伎座スペシャルナイトでの特別上映も行われ、ブルーレイディスクも発売されている。

では、デジタル修復が目指すものは何なのだろうか。

「こうしたデジタル技術を介した修復の後、フィルムレコーディングを行うことで、再度データをフィルムに戻すことができます。劣化したフィルムからアナログの修復をして、データ化して、デジタル修復やカラーグレーディングを経てデジタルのマスターをつくり、そして最後にフィルムに復元する。これだけデジタルの話をしていて、なんでフィルムに戻すのか、と思われそうですよね。でも、実はフィルム自体はすごく長持ちするものなんです。適切に温湿度管理され、保管された場合、その寿命は100年とも言われています。データの簡単な保存によく使われるハードディスクの寿命が10年程度であることを考えると、フィルムがいかに長期保存に向いているかわかると思います。私たちIMAGICAでは、フィルムとデジタルデータの両方での保存を提案しています。その時代の映像が、その当時のままに、現在、そして未来の観客に届いてくれればと思います」

KADOKAWAが担う映像修復プロジェクト

続いて登壇したのは、株式会社KADOKAWA 映像事業局 コンテンツ事業部 著作権開発室の五影雅和氏。KADOKAWAにおける原版保存の取り組みと、修復プロジェクトへの取り組みを、作品の権利元の視点から語ってくれた。

「2002年に、KADOKAWA（※当時角川書店）が、大映より営業権の譲渡を受け、大映映画の権利を継承しました。大映の第1回天然色映画としてつくられたのが1953年製作の『地獄門』。保有しているライブラリーの数は1800本あまりになります」

2004年にKADOKAWAは“原版保存プロジェクト”を発足。角川文化振興財団の助成を受け、フィルム原版の復元と保存を行ってきた。その一環として、調布の撮影所にあったフィルム倉庫から、環境のよい相模原倉庫へ原版を移したり、フィルムの検査・クリーニングを行った。

「フィルムの劣化の状況に基づいてランク付けを行い、このままでは見ることができないという作品から修復を行いました。当時はデジタルではなく、アナログによる修復ですね。ここまでの第1フェイズとすると、角川文化振興財団からの助成が得られたこともあり、保存する為に修復するのが目的でした。そして、助成にも限界があり、第2フェイズとして、活用しながら保存できるように、2014年に部署横断のライブラリープロジェクトを立ち上げ、『角川シネマコレクション』レーベルの下、年2回の映画祭を中核に、DVD、テレビ、配信など横断展開を実施する中で、営業しながら保存、運用しながらデジタル化を進めてきました」

次世代への継承～当時の映像を当時のままに

“次世代への継承”を目的に、さまざまな働きかけを行う。年2回の映画祭の開催や、配信、テレビ放送、DVD・ブルーレイ化、発掘上映会。横断的なプロジェクトとして大映作品を盛り上げていったという。J-LOPや国際交流基金の助成も得た。その中で4K化のプロジェクトも進んでいった。

「復元は、フィルムセンターの定義にもあるように、以下のようになっています。劣化や損傷が見られるフィルムについて、そのフィルムのユニークな特徴を把握し、残存する同一作品の他の素材との比較調査を行い、関係者のヒアリングや文献調査に基づいて、その時点において入手可能な素材、技術を用いて復元を行うことで、出来る限りその作品に真正な(authentic)な状態を再現すること。自分の理解としては、劇場公開当時に観られた状態を、再現することであると思っています」



五影雅和氏

『地獄門』4Kデジタル復元までの道のり

実際に『地獄門』の4Kデジタル復元化はどのように進んでいったのか。

「2011年、アナログ放送からデジタル放送に切り替わった。NHKサイドとしては、デジタル放送の高画質・高音質をアピールする題材として、視聴者から公開当時の印象と違う、と不満が多かった映画を修復して放送するのが一番わかりやすいのではないかと考えられており、『地獄門』を提案したところ修復にご興味頂き、NHKが助成してくれましたね。この時の修復の過程はドキュメンタリーになり、NHKで放送もされました」

まず、仕組みをどう構築して、どの作品を選定するのか。それが最初のステップだったという。次の問題は、何から復元するか、だった。

「オリジナル・ネガから復元するのがベストでしたが、『地獄門』は既に失われていました。そこで、オリジナルの次に世代に近い三色分解で保存されていたフィルムを使いました。次は誰とやるかですね。『地獄門』はイーストマンカラーの第1回作品で、当時の東洋現像所(現IMAGICA)さんがカラー現像の新しい工場をつくるなど尽力してくれたので、IMAGICAさんを修復ラボに選定し、日本で唯一の国際フィルムアーカイブ連盟の加盟機関である東京国立近代美術館フィルムセンターに協力を依頼しました」

カンヌ国際映画祭の審査委員長だったジャン・コクトーに「これこそ美の到達点」と言わしめた『地獄門』。その映像を4Kで修復するためには、ある人たちの目が必要だった。

「次に重要になってくるのは監修者の選定ですね。本作品の助手を務められた森田富士郎カメラマンには“画”を、大映の音の調子を熟知された林基継さんには“音”を監修していただきました。こうした多くの方の協力とIMAGICAの力で素晴らしい『地獄門』4Kデジタル復元版が完成したと思います」

IMAGICAが大切にする修復への思い

その後、会場のスクリーンに『地獄門』の映像が投影され、IMAGICAの中村謙介（映像事業本部 プロダクション部 アーカイブグループ）による、実際の機材を使用した修復作業の実演が行われた。初めて明かされる、ち密なテクニックと映像が美しく蘇ってゆく過程を、会場の多くの受講者たちは食い入るように見つめた。



©KADOKAWA1953



中村謙介

セミナーの終わりには、この日のために特別に制作されたHDR版『地獄門』がお披露目された。元がフィルムだからこそのアドバンテージを活かした、かつて見たことのないほどの鮮烈な色彩表現に、会場外に設置されたHDRモニターの前には人だかりができていた。

新井は「もっとも大切なことは、当時の映像を当時のまま残すことだと私たちは思います。一方、4Kデジタルで出来ること、可能性はたくさんあります。新しい挑戦も取り入れていくことで、より多くの方にクラシック作品に親しんでいただきたい。そのために私たちはKADOKAWAさんをはじめ、多くの方と一緒に修復作業を進めることで、問題に取り組み、良い形で映像を後世に残していきたいと思います。」と締めた。

KADOKAWAの想いに共鳴し、それを具現し、過去の映像にもう一度スポットライトを当てるといふ『地獄門』の修復作業は、映像の遥かな可能性を開く一歩であったと言えよう。映像の明るい未来について考える夜だった。

『地獄門』

鮮麗な色彩を駆使し、平治の昔から語り伝えられる壮大な源平時代の悲恋が甦る！

平安時代末期。平清盛に使える武士・盛遠(長谷川一夫)は、戦乱の中で美女・袈裟(京マチ子)と出会う。袈裟が人妻だと知っても諦め切れない盛遠は、何度も彼女に言い寄り、その都度はねのけられるが、恋の炎はますます掻き立てられるばかり。やがて盛遠は彼女の夫(山形勲)にライバル心を剥き出しにするようになるが、温厚な人格者である袈裟の夫は、盛遠を相手にしなかった。やがて盛遠は袈裟に対し、自分と一緒にしてくれなければ彼女の夫や親戚を殺すと脅すのだが……。



©KADOKAWA1953



©KADOKAWA1953

「日本初のイーストマン・コダックのカラー作品」

監督・脚本:衣笠貞之助

出演:長谷川一夫、京マチ子、山形勲、黒川弥太郎、坂東好太郎ほか

撮影:杉山公平

編集:西田重雄

色彩指導:和田三造

受賞:第7回カンヌ国際映画祭グランプリ、第27回アカデミー賞名誉賞・衣装デザイン賞(カラー)など

公開:1953年

- 『和製喧嘩友達』(小津安二郎 1929年) 2K修復 2003年作業
- 『斬人斬馬劔』(伊藤大輔 1933年) 2K修復 2003年作業
- 『砂の器』(野村芳太郎 1974年) 2K修復 2004年作業
- 『瀧の白糸』(溝口健二 1933年) 2K修復 2006年作業
- 『学生三代記[マキノグラフ版]』(マキノ雅弘 1930年) 2K修復 2007年作業
- 『なまくら刀』(寺内純一 1917年) 2K修復 2008年作業
- 『浦島太郎』(北山清太郎 1918年) 2K修復 2008年作業
- 『幸福の黄色いハンカチ』(山田洋次 1977年) 2K修復 2009年作業
- 『紅葉狩』(柴田常吉 1899年) 2K修復 2010年作業
- 『銀輪』(松本俊夫 1955年) 2K修復 2010年作業
- 『忠次郎日記』(伊藤大輔 1927年) 2K修復 2010年作業
- 『幕末太陽傳』(川島雄三 1957年) 2K修復 2011年作業
- 『地獄門』(衣笠真之介 1953年) 2K修復 2011年作業
- 『カルメン故郷に帰る』(木下恵介 1951年) 2K修復 2012年作業
- 『秋刀魚の味』(小津安二郎 1962年) 2K修復 2013年
- 『道 La Strada』(フェデリコ・フェリーニ 1954年) HD修復 2013年
- 『青春残酷物語』(大島渚 1960年) 4K修復 2014年作業
- 『Shall we ダンス?』(周防正行 1996年) 2K修復 2014年作業
- 『野獣死すべし』(村川透 1980年) 2K修復 2014年作業

- 『時をかける少女』(大林宣彦 1983年)2K修復 2014年作業
- 『セーラー服と機関銃』(相米慎二 1981年)2K修復 2014年作業
- 『日本南極探検』(田泉保直ほか(撮影)1910年～12年)2K修復 2014年作業
- 『おとうと』(市川崑 1960年)4K修復 2014年作業
- 『麦秋』(小津安二郎 1951年)4K修復 2015年作業
- 『Lion City』(Cathay-Keris 1960年)2K修復 2015年作業
- 『桃太郎 海の神兵』(瀬尾光世 1945年)2K修復 2015年作業
- 『ガメラ大怪獣空中決戦』(1995年 金子修介)4K修復 2015年作業
- 『ガメラ2レギオン襲来』(1996年 金子修介)4K修復 2015年作業
- 『ガメラ3邪神覚醒』(1999年 金子修介)4K修復 2015年作業
- 『千人針』(三枝源次郎 1937年)2K修復 2015年作業
- 『ナイルの娘 Daughter of the Nile』(1087年侯孝賢) 4K修復 2015年作業
- 『誰も知らない』(是枝裕和 2004年)2K修復 2016年作業
- 『戦場のメリークリスマス』(大島渚 1983年)2K修復 2017年
- 『東京物語』(小津安二郎 1953年)4K修復 2017年

- 『浮草』(小津安二郎 1959年)4K修復 2017年
- 『泥の河』(小栗康平 1981年)2K修復 2017年
- 『なまくら刀』新最長版 (幸内純一 1917年)2K修復 2017年
- 『小林富次郎葬儀』※重要文化財フィルム(1910年)4K修復 2017年
- 『忠臣蔵』最長版(牧野省三 1910-17年頃)4K修復 2018年作業
- 『男はつらいよ』シリーズ (山田洋次ほか 1969-97年)4K修復 2018年作業
- 『赤線地帯』(溝口健二 1956年)4K修復 2018年作業
- 『夢みるように眠りたい』(林海象 1986年)2K修復 2019年作業
- 『日本の娘 The Daughter of Japan』(Nyi Pu/枝正義郎ほか 1935年)4K修復 2019年作業
- 『丹下左膳餘話 百万両の壺』(1935年 山中貞雄) 4K修復 2020年作業
- 『河内山宗俊』(1936年 山中貞雄)4K修復 2020年作業
- 『妖怪大戦争』(1968年 黒田義之)4K修復 2020年作業
- 『座頭市物語』(1962年 三隅研次)4K修復 2020年作業
- 『大魔神/大魔神怒る/大魔神逆襲』(1966年 安田公義/三隅研次/森一生)4K修復 2021年作業
- 『月は上りぬ』(1955年 田中絹代)4K修復 2021年作業

お問い合わせ：
株式会社IMAGICAエンタテインメントメディアサービス
メディア営業部
archiving@imagica-ems.co.jp